

論 文

知的障害児における自己肯定感の 調査法に関する一考察

中村理美¹⁾・眞田英進²⁾

(¹⁾東京学芸大学附属特別支援学校, ²⁾西九州大学子ども学部)

(平成29年9月21日受理)

A Study on Investigation Method of Self-Esteem in Students with intellectual disabilities.

Rimi NAKAMURA¹⁾, Tsunenobu SANADA²⁾

(¹⁾*Special Needs school attached to Tokyo Gakugei University*

²⁾*Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*)

(Accepted September 21, 2017)

Abstract

The purpose of present study was to investigate the evaluation method of the self-esteem for students of a junior high school for special needs education. In this study, a Rosenberg Self Esteem Scale was conducted for students with intellectual disabilities through semi-structured interview method instead of the questionnaire method. Based on the result of present study, the method and the contents about the survey of self-esteem in students with intellectual disabilities were discussed.

Key words : intellectual disabilities 知的障害
Self-Esteem 自己肯定感

I. 問 題

近年、日本の子どもたちの自尊感情や自己肯定感を育むことの重要性が指摘されており、教育現場では様々な取り組みが行われている。文部科学省（2014）は、日本の子どもたちは諸外国と比べ、学力がトップレベルであるにもかかわらず、自己に対する肯定的な評価（自己肯定感）が低い状況にあると報告した。

松井（2017）は、小学校における自己肯定感を高める教育実践論文の分析を行い2001～2015年の間の自己肯定感をキーワードに含む論文数は360本であったと報告した。また、その定義については、定義がなされないまま、自己肯定感を高めるための実践が進められている場合も少なくないと指摘している。文部科学省（2017）においては、自己肯定感の捉え方について、①勉強やスポーツ等を通じた競い合いなど、自らの力の向上にむけて努力することで得られる達成感などを通じて得られる自己肯定感、②自分のアイデンティティに目を向け、短所を含めた自分らしさや個性を受け止めることで身につけられる自己肯定感、の2つの側面からとらえることが考えられるとしている。

「自己肯定感」は、主に Self-esteem と訳され、自己肯定感と同様の意味として自尊感情がある。その用語の訳や定義をめぐって様々な検討がなされているが、本研究では「自己肯定感」と統一して表記することとする。

自己肯定感を測定する際に多く用いられる尺度に Rosenberg 自尊感情尺度がある（Rosenberg, 1965）。この Rosenberg 自尊感情尺度は、先行研究においても信頼性と妥当性を有する尺度とされている（内田・上埜, 2010；桜井, 2000）。Rosenberg（1965）は、自尊感情を他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のこととしている。また、自身を「非常によい（very good）」と感ずることではなく、「これでよい（good enough）」と感ずる程度が自尊感情の高さを示し、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味するとしている。

教育現場での取り組みとして、特別支援教育においても、障害のある児童生徒の自己肯定感を高めるための手立ての検討が求められており、自己肯定感を育む授業づくりの実践が行われている（梶山・中

山ら, 2013；河本・是永, 2017）。

特別支援教育における自己肯定感の程度の把握は、主に行動観察や支援記録表等の活用によって対象児童生徒の自己肯定感を推測し把握する、もしくは、他者評価シートの活用等（阿部・廣瀬, 2008；東京教職員研修センター, 2011）が一般的である。下田・吉田・内野（2016）、伊藤（2016）は、特別支援学校における軽度知的障害生徒への質問紙法による調査を実施しているが、いずれも高等部の生徒を対象としており、学齢期における調査は少ない。また、伊東（2016）は、質問紙の内容を、軽度知的障害生徒が独りで読んで判断し解答できるものとしているが、知的障害特別支援学校に在籍する児童生徒の中には、読み書きに困難を示すものも多い。これらの読み書きの心理的負担を考慮する上では、被調査者が質問項目を自分で読んで回答するのではなく、調査者が読み上げる必要がある。打浪（2015）は、20歳以上の軽度または中度の知的障害者に対して、半構造化面接法による聞き取り調査を行っている。これより、知的障害特別支援学校に在籍する生徒への調査方法としては、半構造化面接法が適切であると推定できる。

本研究では、知的障害特別支援学校の中学部に在籍する生徒の自己肯定感の評価方法を検討することを目的として、生徒を対象に Rosenberg 自尊感情尺度の質問紙調査内容を半構造化面接法によって実施する。本研究で得られた結果を基に、知的障害児の自己肯定感の調査を実施する際の内容及び方法について予備的な検討を行うことを主眼としている。

II. 方 法

1. 調査方法

1) 調査期間：平成29年6月～7月

2) 調査対象：知的障害特別支援学校に在籍する中学部の生徒10名（1年生3名、2年生3名、3年生4名）を対象とした。男子5名、女子5名であり知能指数（IQ）の範囲は52～71であった。事前に保護者へ本研究に関する説明を行い、協力の同意を得た。

2. 調査内容

Rosenberg 自尊感情尺度は、自尊感情を測定する10項目からなる自己記入式尺度であり、逆転項目が半数含まれる。調査によって選択肢の数が4件法～

7件法を用いるなど異なっており、海外では4件法が多く用いられている(内田・上埜, 2010)。

本研究においては、Rosenberg 自尊感情尺度を参考に作成した10項目の調査を、自尊感情測定尺度(東京都版)の自己評価シートの文言を参考に整理した(表1)。知的障害児にとって、抽象的な質問を自分で読んで回答するのは、心理的負担が大きい。そのため、本研究においては、質問項目はあらかじめ設定されているが、半構造化面接法によって実施し、質問項目を調査者が読み上げ、難しい語彙(例:長所=できること・よいところ)については説明用の言葉を事前に設定し、生徒の理解や状態に合わせて説明を加えた。また、内容理解について確認するため、具体的な場面を想起するよう促した(例:長所=あなたのよいところとはどんなところですか)。質問項目への回答は、調査者が読み上げた質問に対して、対象生徒が「4=とてもそうおもう」「3=すこしそうおもう」「2=あまりそうおもわない」「1=まったくおもわない」の4段階で選択した。選択肢は、1~4の項目と、それに合わせたイラストを手がかりとして用いた(図1)。イラストは対象生徒が普段学校で利用しているイラスト集の中から選択した。調査時間は15~20分であり、事前に練習問題を実施し、調査の回答方法が十分に理解できたことを確認してから実施した。

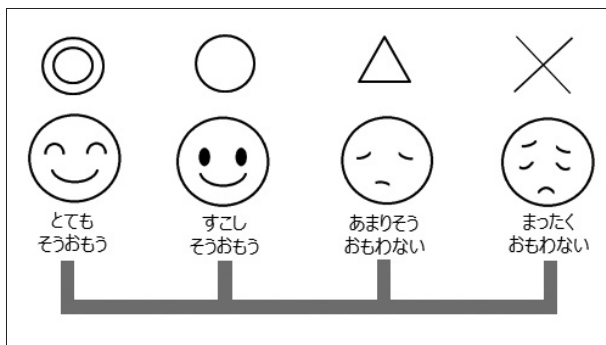


図1 回答用の選択肢

※図1の絵はイラスト集の絵を参考に、本論文用に筆者が作成したものである。

Ⅲ. 結果および考察

項目内容、平均値、標準偏差を表1に示した。平均の最低値は項目8の1.8であった。最高値は項目1~3が3.3であった。項目ごとの得点結果の平均は1.8~3.3の範囲であり、標準偏差の範囲は0.6~1.1であった。選択肢の図表(図1・表1)に関し

ては、回答の際に、イラストを見たり、見比べて悩んだりする言動が確認された。特に、逆転項目については、生徒の多くが手がかりとして活用する様子が観察された。

大学生における点数と比較すると大きく外れた平均値は確認されず、設問8以外はすべて高い結果となった(内田・上埜, 2010)。また、本研究の対象生徒は、「あなたは長所(できること・よいところ)があると思いますか。」の質問において、90%がとてもそうおもう・すこしそうおもうと回答した。東京都版自尊感情測定尺度(東京都教職研修センター, 2011)は、「自分にはよいところがある」と回答した中学3年生の変化について、平成19年度の調査では60.0%であったのに対し、平成24年度には69.1%という結果であった。この結果について、褒められる・認められる・感謝される体験や学習内容・指導方法の工夫により自尊感情が上昇したとしている。

東京都の公立中学校に通う生徒の自己肯定感については、女子よりも男子の方、また、中2・中3よりも中1の方が、有意に自己肯定感が高いという結果が得られている(久芳・齊藤・小林, 2005; 本田・荒嶽・藤林・一期崎, 2012; 加藤・太田・松下・三井, 2013;)。本研究においては、女子よりも男子の方が高い(表2)という結果は同じであったが、学年に関しては異なる結果となった(表3)。都筑(2003)は、学年の上昇にともなって「自己」についての評価が低下する理由として、①自己認識能力の発達によって「自己」を対象化して現実的に見るができるようになるため、②学習の理解や進度の遅れの意識が「自己」に対しての負の影響を及ぼすためという可能性を指摘した。①の自己理解や②の学力の形成に関して、課題や発達段階が個人によって異なる知的障害児にとっては、先行研究と異なる結果となった一因となることが推測できる。また、田島・奥住(2013)が指摘しているように、特別支援学校では、少人数での友人関係や、教員との密接な関わりがあり、生徒の実態や個別のニーズに応じた指導や支援、評価が実践されている。これらのことから、学年を経るごとに、生徒一人ひとりの自己肯定感が高まる要因となったことが推測される。

表1 質問項目および平均と標準偏差

	設 問	平均M	標準偏差SD
1	あなたはいまの自分でよいと思いますか。	3.3	0.9
2	あなたはじぶんはだめな人間だと思いますか。(R)	3.3	0.6
3	あなたは長所(できること・よいところ)があると思いますか。	3.3	0.9
4	あなたは他の人と同じくらいできることがあると思いますか。	2.9	0.9
5	あなたはとくいなことがないと思いますか。(R)	3.1	0.8
6	あなたは役立たずだ(みんなの役に立っていない)と思いますか。(R)	3.1	0.7
7	あなたは他の人(みんな)と同じくらい大切な人間だと思いますか。	3.1	0.8
8	あなたはじぶんのことをもう少し尊敬(大切に思う)できたらいいなと思いますか。(R)	1.8	1
9	あなたは失敗者(失敗する人)だと思いますか。(R)	3.2	1
10	あなたは自分のことを前向きに思いますか。	2.9	1.1

※(R)は逆転項目を示す。

表2 男女別の人数と平均

性別 (人数)	男 (5)	女 (5)
平均 (標準偏差)	3.35 (0.74)	2.68 (0.65)

表3 学年別の人数と平均

学年	中1	中2	中3
人数	3	3	4
平均 (標準偏差)	1.60 (0.74)	3.26 (0.78)	3.20 (0.60)

IV. 今後の課題

今回の調査においては、調査対象者数の制限面は否めないものの、本研究の目的主眼は、通常学級に在籍する児童生徒との関連や違いを統計的に検討するものではなく、調査方法自体の予備的な検討であった。

本研究での調査方法として、①練習(リハーサル)によって調査方法の理解を確認すること、②質問紙法を半構造化面接形式の方法で適用すること、③半構造化面接法によって質問項目の抽象的な情報を具体的に提示すること、④回答の基準を目に見える形で常に掲示しておくこと、⑤調査内容を理解して回答しているかを確認するために、具体的な場面を想起させること、などに配慮して実施した。以上のように障害の特性に配慮した調査方法は果たして有効であったのか否か、今後さらに調査対象事例数を増やし、縦断的に調査することにより研究を進展させたい。

謝 辞

本研究に快く同意・協力していただきました、T特別支援学校在籍の生徒と保護者の皆様方に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 阿部美穂子・廣瀬真理(2008)軽度知的障害児の安心、自信、自己肯定感の獲得に関する研究—児童福祉施設併設特別支援学校における実践から—。富山大学人間発達科学部紀要, 3巻1号, 55-66.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2005)中学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について。東京女子大学紀要, 第40号, 19-28.
- 本田優子・荒嶽木綿美・藤林まどか・一期崎直美(2012)中学生の自己肯定感と教師への信頼感および関わり経験との関連。熊本大学教育学部紀要自然科学, 61, 75-84.
- 伊藤佐奈実(2017)軽度知的障害生徒の学校生活への適応に関する研究—特別支援学校高等部における質問紙調査をもとに—。教科開発学論集5, 13-22.
- 梶山雅司・中山美代・高阪英徳・城一樹・小田原舞・藤井朋子・檜和田祐介・西勉・落合俊郎・若松昭彦・川合紀宗・竹林地毅・氏間和仁・林田真志・木船憲幸・牟田口辰己・谷本忠明・本間孝信(2013)知的障害のある児童生徒の自己肯定感を育む授業づくり:小学校・中学校特別支援学級における体系的な授業モデルの開発

- (2). 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, (41), 191-198.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 (2013) 中学生の自尊心を低下させる要因についての研究：批判的思考の発達との関連から. 静岡大学教育学部研究報告人文・社会・自然科学篇, 63, 135-143.
- 河本勝一郎・是永かな子 (2017) 自己肯定感と特別支援教育を意識した学級経営に関する研究, 高知大学教育実践研究, 31, 109-121.
- 松井香奈 (2017), 小学校における自己肯定感を高める教育実践の検討—実践研究論文を手がかりとして—. 武庫川女子大学大学院教育学研究論集, 第12号, 47-55.
- 文部科学省 (2014) 「教育再生の実現に向けて」. 中央教育審議会 (第90回) 配布資料, 資料1 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/_icsFiles/afieldfile/2014/03/31/1346147-1.pdf (2017年8月30日最終閲覧).
- 文部科学省 (2017) 「自己肯定感を高め, 自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた, 学校, 家庭, 地域の教育力の向上」. 中央教育審議会 (第112回) 配布資料, 資料3-1, 3-2, 3-3, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/1387211.htm, (2017年8月30日最終閲覧)
- Rosenberg, M (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 桜井茂男 (2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 下田渚・吉田ゆり・内野成美 (2016) 特別支援学校高等部 (知的障害) における二次障害への教育的対応—ストレスマネジメント, SSTを中心に—. 教育実践総合センター紀要, 15, 259-269.
- 田島賢侍・奥住秀之 (2014) 障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした自尊感情・自己肯定感の文献検討. 東京学芸大学紀要総合教育学系, 65(2), 283-302.
- 東京都教職研修センター (2011) 自尊感情や自己肯定感に関する研究. 東京都教職員研修センター紀要, 11, 1-38.
- 都筑学 (2003) 小学校から中学校にかけての「自己」形成 (学校教育と子どもの「自己」の形成：教育心理学における「自己」研究の新たな視点. 教育心理学年報, 42, 15-16.
- 打浪文子 (2015) 知的障害者の情報機器の利用に関する社会的課題：軽度及び中度の当事者への聞き取り調査から. 淑徳短期大学研究紀要, 54, 105-120.
- 内田知宏・上埜高志 (2010) Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性及び妥当性の検討—Mimura&Griffiths 訳の日本語版を用いて—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58-2, 257-266.